

ダイバーシティ事業 国際人事交流プログラム（派遣）
ダイバーシティマネジメント報告書

報告日：2019年3月28日

派遣者所属名	人間発達環境学研究科
派遣者氏名	佐藤 春実
調査対象機関名 (派遣機関含む)	インペリアル・カレッジ（工学部、化学工学科）

調査項目（大学）

- ・ 役員数（ 5人）うち女性役員数（ 3人）学長は女性
- ・ 教員数（44人）うち女性教員数（7人）
- ・ 教授数（24人）うち女性教授数（4人）

調査項目（工学部、化学工学科）

- ・ 役員数（ 7人）うち女性役員数（ 1人）
- ・ 教員数（44人）うち女性教員数（7人）
- ・ 教授数（24人）うち女性教授数（4人）

インペリアル・カレッジは工学部、医学部、理学部、ビジネススクールの4学部で構成された、理系に特化したイギリスの国立大学です。訪問先の研究室は、その中の工学部・化学工学科に属し、分野としては「化学」の領域に分類されます。そのため、訪問先の研究室の教授によると、同大学の工学部の他の学科（エンジニア系）に比べると女性教員数は多いとのことでした。確かに大学のウェブページを見ると、生物工学科で9名/45名の女性教員（アカデミアスタッフ）でしたので、化学工学科の女性教員比率（7名/44名）も生物系とそれ程変わらない数であると言えます。一方で、女性教員数が少ないと伺ったエンジニア系は、同大学同学部の機械工学科で教員7名/52名、教授2名/19名と、日本のエンジニア系の学科に比べると、その割合はかなり高く、女性教員数の比較的多い生物系や化学系と比較しても大きな差は感じられませんでした。しかしながら、インペリアル・カレッジの教授（男性）は、化学系は機械系よりも教員の女性比率は高いと感じており、日本におけるそれらの数字が異常なのだと改めて思いました（機械系は学生も含めて女性はゼロに近い数字です）。

また、女性教員は出産の前後1年ずつは研究以外の大学の業務（授業や会議など）は完全に免除されるとのことで、第2子以降でも同様にこのシステムが働くため、何年も授業をやっていないという女性教員もおりました。教員の勤務時間は日本の理工系の教員に比べるとそれ程長くはなく、夜遅くまでの勤務の習慣はないので、授業と会議が免除されれば、出産や育児で大きく負担がかかることはないように思います。更には、男性教員への周知が徹底しており、女子学生や女性研究者が関係するイベントが頻繁に行われています。学内にも女性教員や博士過程の女子学生の写真などが貼られ、女性の存在や女性が働くあるいは学ぶための環境が整っていることをアピールしているのを感じました。

また、女性教員に限らず男性教員も含めて、教員の仕事に雑用が少なく、研究に集中できる環境にあると感じました。例えば、研究に関しては、学内の設備サポート窓口で、研究に必要なものや足りないものを調達できるようになっており、部品の選定・発注や修理などに関する事務手続きを教員がする必要はありません。実験室の掃除や定期的な電気チェックなどの安全管理も専門の方が担当しています。各部屋はオートロックでセキュリティー管理されており、教員は研究以外の細かいことはほとんど関与する必要がありません。また、学科にはコモンスペースが設置され、博士課程以上の学生とポスドク、スタッフは自由にお茶（セルフサービスでコーヒーやお茶が自由に飲める）や食事をすることができます。そこでは分野の異なる人々が活発に交流できる仕組みができており、時折（ランチオン）セミナーや各種イベントが開催されていました。勤務時間がそれ程長くないのにコンスタントに質の高い論文を生産できるのは、母国語が英語というだけでなく、効率よい仕事のやり方にあるのではないかと感じました。またそのような取り組みがすでに確立されているので、女性教員がライフイベント等で一時的に仕事の量を減らしても、それ程目立つこともなく、ごく当たり前のこととして受け入れられているのではないかと思います。このような働き方が、女性が活躍するための様々なサポートをより受けやすい状況にしている要因の一つではないかと思えます。

学生に関しては、博士課程に在籍する女子学生も多く、大学としては理系みの大学（医学部と工学部）であるのに、大学で見かける学生の男女比は日本の総合大学と変わらないように思います。大学院生（博士課程後期）と話しをする限り、男女の格差は全く感じられず、若干女性の割合が少ないですが、それを除けば全くの平等な状況にあると言えます。また、他国出身者や留学生が多く、宗教や文化の異なる学生が集まっているので、学食メニューの配慮やセキュリティーの整備もかなり進んでいます。学部生や大学院生の学生は中国からの留学生が大半で、次いで韓国と、アジアの学生がかなりの割合を占めています。しかしながら日本人はほとんど在籍していません。同じ大学院生でも授業料がイギリス人と留学生で大きく異なり、例えば中国からの留学生だと年間で300万円ほどの授業料＋生活費となりますが、イギリス人はその数分の1です。中国からの留学生が多いのは、授業料が高くても世界ランキングで上位に位置する大学で卒業したという実績が欲しいからだそうです。大学もビジネスとして、授業料でしっかり稼いで研究費に廻す仕組みが出来上がっているのだと思います。（研究室には高額な装置が沢山ありました。）

研修中に国際女性デー（3月8日）があり、その週はWoman@Imperial Weekと称して様々なイベントが開催されていました。その中の「WHEN, Women's Higher Education Network」の代表であるAlice Chilver氏による「Speeding up gender equality in higher education」という講演を聞くことができました。講演の中でAlice Chilver氏は、ネットワーク作りがとても大事であると仰っていました。まずは学科内や学部内でのネットワークを作り、それを広げていき、やがて外国とのネットワークを作ることができたら国際的に活躍できるようになると論じていました。

最後に、インペリアルカレッジのライフイベント等に関する情報をまとめます。

出産・育児休暇の他、マタニティミーティングと称した妊婦が出産休暇（方針や資格など）について上司と打ち合わせをすることが推奨されています。教員はこれらの休暇の他、1年間

の授業・会議等の免除があります。出産・育児に関するワークショップを定期的で開催（母親だけでなく父親対象のワークショップもあり）しています。勤務時間は全ての職員にフレキシブル勤務の申請が可能です。

参照：<http://www.imperial.ac.uk/parents-network/before-baby/maternity-leave-entitlement/>